セルフライフセービングの必要性に関する一考察
～２００９年８月１８日の水難死亡事故の経験から～
A consideration of the need to learn “Self-Lifesaving”
~From the experience of a drowning fatal accident onAugust 2009 the 18th~

1K06A157　　田代　豪希
指導教員　主査　太田章先生　　副査　宮内孝知先生

【第１章　緒言】

四方を海で囲まれた島国の日本では、海水浴や海辺でのレクリエーションが広く親しまわれている。しかし、毎年夏になると、水難事故や水辺での事故のニュースが後を絶たない。しかし日本ライフセービング協会は日本全国の海水浴場の約 15%しか関与しておらず、そのほとんどが関東圏である。

このように、ライフセーバーだけによる普及活動、また監視活動には限界がある。また日本ではライフセービング活動とは「ライフセーバーが溺れている人を助けること」という偏った認識が大半を占めているように感じる。実際のライフセービングとはもちろん救助もあるが、「事故を未然に防ぐこと」が大前提である。つまり、ライフセーバーでなくとも、一人一人が自分の身を守ることがライフセービングの根底なのである。

私も大学入学と同時に、ライフセービングサークルに入り、ライフセービング活動に携わり始めた。そして３年の活動を得て、４年目を迎えた今年、2009 年８月 18 日、私はパトロール中に水難死亡事故に遭遇した。その経験から、私含め周囲の危機管理の不足を実感し、改めてセルフライフセービングが必要であると感じた。

「助けてもらえるから大丈夫」という意識から、「自分の身は自分で守る」という意識に少しながらでも変わっていけるように、国民一人一人がライフセービングの根底にある考えを理解することが重要であると考える。

【第２章　ライフセービングとは】

ライフセーバーはボランティア活動を基本とし、自他の生命を尊重する社会貢献を展開するものであることから、「誰でも」参加できる活動であることを確認しておきたい。社会奉仕と生命尊厳の精神に基づいたものである。

ライフセービングとは、「溺れた者を救う」という救助活動に限定されたものではなく、「溺れない安心な環境をマネジメントする」を大前提におき、さらには日常生活の危機管理も含めて、総合的に安全を提供できる活動を指している。その活動は世界中で普及されたものである。

それらを、ライフセービングの世界史、日本史、JLA を知ることで、ライフセービングの根底を理解する。

【第３章　ライフセービングの活動】

パトロール、教育、環境保全、競技、トレーニング等の活動を通して、ライフセービングの普及に努めている。

【第４章　Ｉ県Ｎ海水浴場での事故詳細】

実際の水難死亡事故の経験を、時系列に紹介する。

【第５章　考察】

安全はどこから生まれてきたのだろうか。政

府、警察、消防、自衛隊など公務員だろうか。私はそれを否定はしないが、正解でもないと思っている。それらはあくまでも後発的なものであって、根本ではない。安全とは、「私たち１人１人の意識が相互依存の中で集約され、形成しているもの」だと、私は思う。しかし、「誰かが守ってくれる」という意識がないだろうか。

セルフライフセービングを考えるにあたって、根本的に問題なのは親の意識の低さであると感じる。

１人１人が個人の安全に責任を持って、生活することが必要なのではないだろうか。

【第６章　まとめ】

ライフセービングについて理解を深め、身の回りから始められるセルフライフセービングを実践してもらいたい。そして、ライフセーバーが必要とされなくなる世界が理想である。